

# 職人の美学

トップランナーたちのこだわり

文・写真 八楯悟志

## 舞台を降りて ビルクリーニング業に

父親が営む清掃会社でアルバイトをしながら、長らく舞台役者として活動してきた。芸歴は約20年に及ぶ。天職だと思った役者を廃業したのは、2つの理由がある。

1つは結婚を機に生活を見直そうと考えたこと。もう1つは、尊敬する先輩の役者が他界し、心に穴が開いてしまったことだ。これらが重なり、役者人生に幕を下ろし、徐々に慣れてきた清掃の仕事一本に絞っていくことに決めた。

柳瀬学は現在、パワーストーン(株)の代表取締役として、昼夜を問わず現場を飛び回っている。社名のとおり主に石材を扱う会社だが、依頼があれば塩ビタイルや長尺シート、カーペット、ガラスなど、何でも清掃する。たった1人で始めた仕事も今ではすっかり軌道に乗り、所属する職人の数も増えてきた。しかし、今でこそ順調な柳瀬の清掃人生も、始めた当初は苦労の連続だった。

## 石材研磨の 魅力にひかれて

最初は清掃が好きではなかった。汚いものを触ることも、自分自身が汚れることも嫌いだった。ところが、25年ほど前に石材と

出会い、8年前に本格的にそれを研磨する作業を覚えてからは清掃に興味を湧いてきた。石材を磨けば磨くほど、見違えるほどの結果が出た。また柳瀬が石材研磨を本格的に開始した当時、石材を扱う清掃会社は少なく、そこにビジネスチャンスを見いだした。

いずれ石材研磨を専門とする清掃会社を立ち上げたい——。そう思うようになった。

若かったころには、苦い思いもした。あるときは顧客の終了確認を得られずに、工期が終了するぎりぎりまで30時間もぶっ通しで作業をした。最終的には何とか納得してもらったが、事前のコミュニケーションやテスト施工の重要性を再認識する出来事だった。

周りに石材研磨に関する知識のある者がおらず、すべてが試行錯誤の繰り返しだった。資機材の販売店にも石材専用の薬品は置いていなかった。質問に的確に答えてくれる店もなかった。

当時の清掃業界には、石材に関しては、せいぜい「酸を使えばよい」という程度の認識しかなかった。しかし、大理石に酸は禁物である。アルカリ性の洗剤は「やや良し」とされていたが、強アルカリ性の洗剤を使うと、大理石が焼けてしまう。今では常識であるこうした知識もなく、苦労を重ねた。

## 21 柳瀬 学

パワーストーン(株) 代表取締役

昨日の自分に負けない  
今日の自分でありたい

## 番手を選ぶ テクニック

石材の研磨では、ダイヤモンドパッドの番手選びで仕上がりの良し悪しが決まる。粗いパッドで研磨をはじめ、徐々に目の細かいパッドに変えて仕上げていく。柳瀬の最もスタンダードな番手は、例えば、#800、#1,500、#3,000、#5,000、#8,000の5工程だ。

もちろん石材の状態や顧客の希望によっては番手を増やすことも減らすこともある。ただ、現場の状態に応じて番手を追加することもある。その判断は石材に精通する職人にしかわからない。

柳瀬は若いころ、技術を得るために人工出しにも積極的に出向いた。そこで他社の職人たちと意見交換するうちに、番手の選択に関する知識を得た。「番手選びは研磨職人にとって生命線です」と語る。

「番手の選択を間違えると、取り返しのつかない失敗につながります。大理石のような石材はすべて一点物なので、弁償したくてもできないのです。その意味で作業時には常に緊張感を持っています」

リスクが大きい反面、的確な番手で研磨をすると、見違えるような出来栄になる。柳瀬が目指すのは、すべての現場で顧客の予想を上回ることだ。

## こだわりの技術で 新品同様の状態に

この仕事をしていると、うれしいと思う瞬間がいくつもある。例えば施工後に、建物の利用者から「この石は張り替えたのですか？」



番手選びは研磨職人にとって生命線です。番手の選択を間違えると、取り返しのつかない失敗につながります。大理石のような石材はすべて一点物なので、弁償したくてもできないのです。その意味で作業時には常に緊張感を持っています。

と聞かれることがある。研磨職人にとって最高のほめ言葉だ。

研磨がうまくいったとき、石材は誰もが驚くほど美しい光沢を放つ。「張り替えたのですか？」と聞いた利用者の反応も決して大きさではない。そのときは、15年前に張った大理石のしみ抜きをし、5工程の研磨を加えて新品同様に復元させたのだ。

人間である以上、なんとなく仕事に身が入らない日はある。早く帰宅したいと思うこともある。さらに具体的に言えば、研磨を5工程から3工程に減らしたい衝動に駆られることもある。そんなときでも自分を律し、きちんとした仕上がりを実現できたとき、職人は自分の仕事に満足する。

実際のところ、施工後の石材を一見しただけでは、3工程で仕上げたのか5工程で仕上げたのか、素人目にはわからない。だが、職人の目はごまかせない。石材がどんな状態であっても、時間の許す

限り全力を尽くす。

## 今日の自分よりも 明日の自分

柳瀬は周りから「新しもの好き」と言われる。自分でもそう思う。それで構わないとも思う。なぜなら、現在使っている道具や洗剤が必ずしもベストではないかもしれないからだ。

「時代の流れに応じて道具も進化していきます。昔の道具がいつまでもベストではないはずですよ。新しいものを常に試していきたいと思っています」

時代の変化に敏感に反応し、その先を行く自分でありたいと願う。そのためには、新しいもの好きと揶揄されても情報収集と研究は怠らない。

また、作業の段取りなどについても反省をおろそかにはしない。現場から帰るバンの中でハンドルを握りながら、今日のやり方は本当にベストだったのだろうか、も

うひと番手加えれば光沢がさらに上がったのではないだろうか、もっと早く効率よくきれいになる作業方法はなかったらどうかと考える。こうした反省が、今日の自分よりも明日の自分のレベルを高めることにつながる。今日は昨日の自分を超えたい、明日は今日の自分を超えたい。この願いを叶えることが柳瀬の美学である。

すでに一流の技術を持っている柳瀬だが、「石材の研磨に関してはいまだに自信がありません」と語る。だからこそ探求心を持ち、より良い方法を探す。上昇志向を持ち続けられるのは、胸の奥にわずかな不安を抱いているからである。

## オーダーメイドの仕事をしたい

石材の状態は1点1点異なるものだ。まったく同じものはない。それぞれの石の状態に合わせて作業を変えるのが柳瀬流である。

「私たちは既製品ではなく一点



愛用のデュアルスピードを使用して床を磨く



今回の現場と一緒にいった広瀬信之介さん（左）と、父親の柳瀬猛さん（右）

物の石材を扱っています。石材には1つひとつに異なる顔があり、場合によって異なる清掃方法が必要です。他人が見たら自己満足の世界だと言うかもしれませんが、私は私のやり方で最高の仕上がりを目指します」

状態の違う1つひとつの石材。それぞれに合わせてオーダーメイドの施工をすることで、よりベストに近い結果が生まれる。

## 役者の経験が今に活かしている

柳瀬は、役者だったころの経験が今の仕事に活かしていると語る。性能が良いことを前提として、他の業者があまり使わないポリッシャーやウエットバキュームを好んで使う。愛用するポリッシャーは「デュアルスピード」だ。この珍しい道具が顧客へのアピールに

なる。顧客は見慣れない道具を持つ柳瀬に期待を膨らませ、柳瀬はその期待を上回る結果を出す。

また作業着にも工夫を凝らしている。会社のロゴマークを胸の部分にさりげなくあしらっている。こうした演出は役者出身ならではの発想だ。

道具や服装なども含め、顧客にどう見られるか。それを意識することで、作業中に良い緊張感が生まれ、物損などの事故を未然に防ぐことができる。

\* \* \*

舞台を降りた役者はビルクリーニングという新たなステージに立った。そこには緊張感ややりがいがあり、何よりも清掃をやり通したことで得られる爽快感があった。時代の流れに後れをとらず、最前線で活躍する柳瀬。これからも現場主義の職人であり続ける。

## 柳瀬 学 (やなせ まなぶ)

明治学院大学法学部を卒業後、清掃のアルバイトをしながら舞台役者として活動。2008年に㈱パワーストーンを設立し、代表取締役役に就任。常に時代に埋没することなく新しいことに挑戦し、また最高の結果を出せるよう、常に努力していきたいと考えている。モットーは、仕事の中で喜びと楽しみと遊び心を見出すこと。

